

一般演題7 O7-4

多数回・長期的な高気圧酸素治療により QOL向上と社会復帰を果たした難治性放射 線性晩期有害事象の2例

丹羽康江^{1) 2)}

- | | |
|----|--------------------|
| 1) | 津山中央病院 放射線科 |
| 2) | 兵庫県立粒子線医療センター 放射線科 |

【背景】

近年、放射線治療後数年を経て生じる放射線治療後の晩期有害事象(晩期障害)が問題となりつつある。晩期障害は照射を受けた部位に永続的に残る進行性の変化であり、いったん発生すると非常に難治的な病態である。この晩期障害に対する高気圧酸素治療(HBO)を多数回、長期的に行うことで完治、社会復帰を果たした2症例を報告する。

【症例1】

58歳、就労男性、左鼠径部脂肪肉腫手術後部に炭素イオン線治療 70.4GyRBE/32frを施行。治療開始後15か月目に表皮裂傷を誘因に2cm×1.3cm大の皮膚潰瘍を発症。外用薬治療を行うも潰瘍拡大、疼痛悪化、就労・睡眠障害をきたし16か月目よりHBO開始。治療開始後17か月/30回時点では潰瘍縮小はわずかで潰瘍は残存していたが、疼痛改善認め有効性ありと判断し、18か月以降2-3回/週で治療を継続した。19か月時点で初発潰瘍の近傍に新たな小潰瘍が発生するも、治療を継続するうちに縮小、疼痛消失により鎮痛剤も不要となった。その後週1回で65回まで継続を行い、潰瘍再燃傾向なく完治と判断、HBOを終了した。その後22か月時点、23か月時点で新たな小潰瘍が発生するもいずれも保存的治療で治癒を得られた。炭素イオン線治療から44か月、HBOの終了後17か月经過時点で腫瘍、潰瘍の再燃は認めず、就労も問題なく継続できている。

【症例2】

34歳女性、右上顎歯肉軟部悪性腫瘍術後、炭素イオン線治療 70.4GyRBE/32fr施行。急性期粘膜炎が遷延する中、治療開始後5か月時点で感染併発したの

を契機に右上顎骨髄炎・骨髄壊死を呈し、6か月目より抗生剤投与とともにHBO開始。HBO-30回時点で疼痛悪化、熱発・激痛、開口障害を認め更なる感染制御とペインコントロールのため入院加療。退院後も外来でHBO継続するも自宅ではほぼ臥床(PS3)状態だった。HBO60回時点で疼痛軽減みられはじめ、80回以降疼痛、鎮痛剤内服量の明らかな軽減あり、感染再燃繰り返すため週2-3回に減じ継続。歯科口腔外科主治医と連携し、徹底した口腔ケア、抗生剤の薬剤ローテーションも継続した。HBO開始後48か月で300回を超え、経口摂取量・体重増加、外出可能(PS0-1)となりHBO終了。50か月時点で腫瘍再発は認めない。

【考察】

この2症例はいずれも30回時点ではわずかな改善・悪化を呈していた。その後の長期的な追加治療により、晩期障害は緩徐に改善を得られ、社会生活を営める程度までPSも改善した。またHBO終了後に再燃した潰瘍は、自己治癒能力のみで完治することができた。臓器や組織により放射線感受性は異なるはずであるが、多くの報告において治療効果に即した晩期障害の臓器別評価やstagingまでは十分に開発されていない。また好発時期があることを踏まえ、障害発生が予測できることがあるが、想定外の発症の場合に別病態が合併している可能性があることも考慮すべきである。当2症例の経過から、すべての晩期障害の症状が進行性というわけではなく、治癒・改善を期待でき、「諦めない」意義は十分にあると考える。また発症期間中は「がん」と「晩期障害」の精神的肉体的二重苦能の状態であることを踏まえ、日常生活における活動性の維持・向上を目指すがんリハビリの一環としての役割も果たしたのではないかと考える。30回という治療回数は治癒経過途中に過ぎず、HBOの真の効果を評価するには更なる治療回数が必要であろうと推察される。

【結語】

十分な治療回数と治療期間に、抗生剤投与やケアの継続的併用で略治・完治を得られ、社会活動性の維持・向上が可能となった。がん罹患したAYA世代、就労世代の社会復帰を目指し、多数・長期的なHBO継続は有効であると考えられる。